

シンポジウムB

子どもと親が安心して医療を受けられるための
医師・看護師・コメディカルの役割と協働

シンポジウム開催にあたり

鴨 下 重 彦 (厚生労働科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業「小児科産科若手医師の確保・育成に関する研究班」)

本研究班は小児医療、産科医療の医師不足を心配された、坂口力前厚生労働大臣のお声がかかりで3年前に発足し、早くも最終年度に入り、しかもあと5か月を残すばかりとなった。研究目的は「①小児科医、産科医に過重な労働が強いられている実態などを明らかにし、②その改善のための人材をいかに確保・育成していくか、③限られた人材、財源など医療資源をいかに効率よく配備するか、などの課題について、21世紀の小児・周産期医療のあるべき姿として、幅広く提言すること」であった。その目的に沿って班全体を4つのグループに分け、①小児科医・産科医をとり巻く環境の現状と認識に関する研究(分担班長 松尾宣武)、②小児科医・産科医の勤務状態の改善に関する研究(分担班長 中野仁雄)、③今後の小児科・産科医療体制に関する研究(分担班長 清野佳紀)、④小児科・周産期医療に関連する保健医療専門職員の育成に関する研究(分担班長 片田範子)、それぞれ年度により分担研究者を補強したり、多少の組み換えを行って研究を続けてき

た。小児科医、産科医だけ、あるいは医師だけでは解決しないことも多く、またメディアの方々にも問題の正しい把握と報道をお願いし、患者・保護者にも理解と協力をいただき、地方行政はもちろん地域社会を挙げて小児・周産期医療の危機に対して、ご理解とご支援をいただくため、これまでも各地で学会などの機会を捉えて公開シンポジウムを開催してきた。今回は盛岡で第51回小児保健学会が行われる際に、会頭の千田勝一教授にお願いして、本シンポジウムを開催できる運びとなったのである。小児・周産期医療の充実のためには、特に看護師、保健師、助産師、栄養士その他コメディカルの方々との協力が不可欠であることは言うまでもなく、今回は柳澤正義成育医療センター総長と分担研究班長の片田範子兵庫県立大学看護学部長に座長をお願いし、コメディカル班の方々を中心に講演をお願いし、行政からもご意見をいただくことにした。シンポジウムで活発な意見交換が行われ、是非研究班としての政策提言に結び付く成果を期待している。